教えてもらった話

私たちが大切なことだと感じたこと

Vol　3

ご自由にお持ち帰りくださいませ

安　心・快　適　そ　し　て　ワ　ク　ワ　ク

株式会社 くるま生活

『水と油と・・・』

●むかしむかし、ジャンケンで勝負するときにはグーとチョキのどちらかしかなかった。グーとチョキは頻繁に勝負したが、いつも勝つのはグーだった。だからチョキは「ぼくが勝つ日は来るのだろうか？」と悩んでいた。時々グーが気をつかって「おい、チョキ君、いっしょに飲みに行かないか」と誘ってくれる。だけど酒が入ればどうせグーの自慢話ばかり聞かされそうで行く気になれない。

●ある意味でグーとチョキの関係は水と油のようなもので、上下関係が逆になることはない。ましてや、交わって引き分けになることなど絶対にない。このままじゃ意味がない。チョキはいっそのこと、ジャンケン業界からきれいさっぱり足を洗って田舎へ帰ろうと思っていた。田舎の高校に帰れば、若い生徒たちがチョキを縦向きにかえて「はい、ピース！いえーい」と幸せそうにしてくれる。そこなら自分の活きる道がありそうだ。そんな考えをお母さんにメールしたところ、すぐに返事が届いた。「そのうちいいこともあるよ。じっくり力をつけなさい」

●ある日、びっくりする知らせが入った。このジャンケン業界に新人が入ってくることになったというのだ。その新人は「パー」という変な名前だという。彼は今日、グーに会いに行ったらしく、グーからさっきこんなメールが届いた。「さっきあいつに会った。あいつすげえぞ。試しに何回か勝負してみたら、このぼくが全敗したんだよ。世の中にこんな強いヤツがいるな
んてありえないと思った。悔しくて今夜は眠れそうもないよ」

●そのメールをみて、チョキはますます凹んだ。グーよりもっと

強いヤツがいるなんて・・・。できれば顔も見たくなかった。次の日は三人がはじめて顔をあわせて勝負をすることなっていたが、チョキは欠席するつもりだった。どうせ結果は分かっている。1位 パー2位 グー3位 チョキ　この順番でランキングが決まるのは分かりきっている。負けてみんな
に笑われるくらいなら欠席して不戦敗になったほうがましだ。
●その夜、お母さんにメールした。「そういうことだから、明日は欠席するつもりだよ。どうせ勝負したって今まで以上にひどい負け方をしそうだしね。あ、そうそう、できればこれを機会にお母さんのいる実家にもどって一緒に暮らそうと思うんだ。そして地元の高校生たちを相手に仕事をしようと思ってる」めずらしくお母さんから返事が来なかった。まだ 8時なのに、もう眠ったのだろうか。
●翌朝、気になったのでお母さんに電話を入れてみた。すると、お母さんは泣いていた。「あなたをそんな弱虫に育ててしまって、わたしは天国にいるお父さんに顔合わせできないよ。自分の力を試すことすらしないで親元にもどるなんて・・・。ゆうべはお父さんの仏壇の前でお詫びしながら朝をむかえたのよ」と声をふるわせている。
●チョキは詫びた。「お母さん悲しませてゴメンね、結果は分かってるけど今日はやっぱり行くことにする。三人のジャンケンなんて初めてだけど、とにかく思いっきりやってみる。今日のところは潔く負けて、これからのことは今晩よく考えてまた電話する。とにかく今日は行ってくるから。元気を出してね」
●チョキは試合場にむかった。グーには絶対勝てないチョキの前

に、グー以上に強い相手が出現した。名前はパーという。どんなに強いのか想像できないほどだ。そんな相手を加えて三人で勝負することに気が引けていたが、お母さんを悲しませたくないのでとりあえず試合会場に向かったチョキ。
●すでにグーもパーも来ていた。ふたりで練習試合をしていたようで、グーが全敗して元気がない。チョキとパーは初対面の挨拶もそこそこに、さっそくリングにあがった。ここが試合場らしい。今日は合計で 30 試合することになっている。
●そして運命の一試合目、審判のかけごえにあわせて「ジャンケンポン」のタイミングで手を出した。いつもならグーとチョキだけだが、そこにパーが加わっていた。あれ、負けじゃない、引き分けだ。
●そのまま 30 試合戦ったが、結局すべてが引き分けだった。
これはチョキの人生観を変えるできごとだった。グーと戦っていたときはいつも負けたが、パーには毎回勝てるのだ。そして三人で戦うと引き分けになる。
●試合前には「どうせ 30 戦全敗さ」と思っていたチョキだが、30 戦して 30 引き分け（つまり無敗）という成績に胸を張った。その場でお母さんに電話した。「お母さん、一度も負けなかったよ」するとお母さんは喜んで、料理の話をしてくれた。「水と油に酢を混ぜると中和するのを知ってる？揚げ物にソースをかけるとおいしく食べられるのはソースに含まれる酢のおかげなの。酢があるから揚げ物の油っこさが中和されるのよ。あなたたち三人は水と油と酢の関係みたいね」
●お母さんの話を聞いて、歴史好きのチョキは薩長同盟の話を思

い出した。もともと薩摩と長州という犬猿の仲を和解させ、同盟を結ばせたのは酢のような存在の竜馬のおかげ。竜馬のビジョンと人柄が薩長を結ばせ、明治維新へと向かわせたのだった。
●一対一ではうまくいかないことでもそこに第三者が加わることで一気に事情が変わってくることがある。それは水と油に対する酢のようなものだ。
●結局、試合のあとグーチョキパーの三人は子供たちが大好きなあの遊びで帰っていた。ジャンケンしたあと勝った人がやるあれだ。「グリコ」「パイナツプル」「チヨコレイト」。最近では、「グラタン」「パパイヤ」「チヨコレイト」というそうだが・・・。

がんばれ社長！武沢さんのメルマガより

『兄妹の情』

　ファミレスで珈琲飲みながら仕事をしていると…隣のテーブルに、親子が座ったんです。妙に若作りしてる茶髪のお母さんと、中学一年生ぐらいの兄、そして小学校低学年ぐらいの妹です。まあ、どこにでもいる家族連れだなあぐらいにしか思ってなかったのですが……驚きました。
 母「ほら！　早く決めなさいッ！ったく、トロいんだから！」
 お母さんが、デフォルトでキレてるんですよ。子どもがなにをしても、怒鳴りつけるんです。
 妹「それじゃ、わたしカレーにするー」
母「そ。わかった」
妹「わたし、カレー好きー」
母「うるさい！！そんなこと聞いてないでしょ！！」

ちょ、カレー好きって言っただけじゃん！なんで、怒鳴るんだよ？！ヽ(`Д´)ノ
お兄さんの方は、もうこのお母さんに呆れてるのか、無表情でそっぽ向いたまま、一言も喋ろうとしません。注文を決める時もメニューを指さしただけ。関わり合いになるのを、極力控えているみたいです。料理が届いてからも、お母さんはキレっぱなし。
妹「いっただきまーす」
母「黙って食べなさい！」
妹「……ｼｮﾎﾞｰﾝ(´・ω・`)」
兄「……」
ただカチャカチャと鳴り響く食事の音。
　さっさと自分だけ平らげた母親は、タバコ吸いながらケイタイをいじり始めました。はぁぁ～やるせねぇ('A`)
すると突然、妹が明るい顔をして口を開いたんです。
妹「あ、そだ、お母さん！聞いて聞いてっ！あのね！えとね！今日ね、学校でね、とってもいいことが……」
母「うるさい！食べてる時は騒がないの！周りの人に迷惑でしょ！」
って、ちっとも迷惑じゃないよ！うるさいのは、アンタだよ！そのコの話、聞いてあげてよ！
怒鳴られてびっくりした妹が、カレーをテーブルにほんのちょっと落としちゃった…
母「あーもー汚いな！なんでちゃんと、食べられないの？！綺麗に食べなさい！綺麗に。あーもームカツク！！」
烈火のごとく、怒る母。そんなに怒るほど、こぼしてないだろ

ー？！ヽ(`Д´)ノ
妹「うう…ごめんなさい……」
ブツブツ文句いいながら、母親はケイタイをいじくっている。妹は涙目。兄は一言も喋らずに、黙々と食べてる。まるでお通夜みたいな雰囲気に包まれたテーブル。こんな食事、楽しいはずがない。すると。母親のケイタイが鳴り始めました。
母「ちょっと、お母さん、電話してくるから。サッサと食べちゃってね」
　そう言い残して、ケイタイ片手に母は店から出ました。電話するヒマがあったら、我が子としゃべれよ！子育てを経験するどころか、恋人もいない僕には言う資格がないけど、それでも言いたい。もうちょっと、子どもとの接し方ってもんがあるだろ。それじゃ、あまりにも可哀想だろ。子どもがグレてからじゃ遅いんだぞ、ｺﾞﾙｧ(`Д´)と、隣のテーブルで、私はキレまくっていたんですが……次の妹のようすを見て、怒りも吹き飛びました。
　そのコは涙目のまま一生懸命カレーを食べてたんです。お母さんの言いつけを守りたいから、ゆっくり食べていたら怒られてしまうから……味わう余裕もないぐらい、急いで食べてた。でも、もともと食べるのが遅い子なのでしょう。焦っているからか、口の周りをべそべそに汚してしまっていて……きっと、それをまた怒られてしまうのに、それすらも気付かずに必死にカレーをかき込んでいるんです。目にいっぱい涙を溜めて。一生懸命に。あぐあぐ。もうね、この世には親子の情はないのかと、寂しい気持ちになってしまいましたよ。あんなお母さんはやめて、お兄さんチの子になれとそう言って抱きしめてあげたくなったほどです。そ

のとき一言も喋らなかった兄がボソッと言ったのです。
兄「……そんなに急がなくてもいいよ」
妹「え？」
兄「ゆっくり食べな」
妹「で、でも……お母さんが」
兄「いいから。好きなんだろ、それ」
妹「うんっ」
兄はチラッと母親が出て行った出口の方を確認しつつ…
兄「で？　なにがあったって？」
妹「？？？」
兄「学校でいいことあったんだろ」
妹「う…うんっ！　あのね！　えとね！　今日学校でね！」
　妹は、楽しげにしゃべり始めました。他愛もないことだったんですが、とっても嬉しそうに。
　きっと、聞いてもらえるだけで嬉しいんでしょう。さっきまで涙目だったのに満面の笑みを浮かべています。兄は、にこりともせずに話を聞いてあげていたのですが、
兄「そっか。良かったな」
と言って妹のべそべそになった口元を拭いてあげたのでした。親子の情は見えなくとも、兄妹の情はちゃんとありました。きっと、この二人はまっとうに育つと思います。

『感謝』

　あるお母さんが、言いました。「どうして、もっと早く走れなかったの！　そうしたら、１番だったのに・・・」

隣のお母さんが、言いました。「最後まで、走れたね。えらいね！初めて、最後まで走れたね！」
　ひとりのお父さんが言いました。「なんで、そんなに汚すんだ！絵の具があちこちについているじゃないか！」
隣のお父さんが言いました。「絵の具の筆が持てたね！よかったね！　つぎは色を塗ってみようか。」
　ある上司が言いました。「どうして君は、いつも間違うんだ！真面目にやってくれなきゃ困るんだよ！」
隣の上司が言いました。「今日は、１回しか間違わなかったね。君の真剣さに感謝するよ！」
　あるご両親が産まれて来た赤ちゃんを見て、言いました。「もっと色白だったら、よかったのに・・・」
隣のご両親が言いました。「産まれて来てくれて、ありがとう！かわいいベイビー待っていたよ。」
どんな顔をしていても
ゆっくりでも
おっちょこちょいでも
どんな肌の色でも
産まれてきた事に感謝して
人生に感謝して
あるがままに感謝してその感謝を輪を広げよう
世界が感謝でいっぱいになるまで・・・

87 歳の大学生ローズの話より

　初めての授業で、教授は自己紹介をし、「今日は知らない人と友

達になりなさい」という課題を出した。私は席を立ち、周りも見回した。すると突然誰かが私の肩を叩いた。振り向いてみると、なんとそれはお婆さんだった。

　彼女の笑顔は光って見えた。

「やあハンサムボーイ。私はローズよ。８７歳なの。ハグしても良い？」 私は笑い、とても喜んで「もちろん！」と答えた。彼女は自分をぎゅっと抱きしめてくれた。

「お婆さん、なんでまだそんな若くてキレイなのに大学で勉強してるんだい。」

「もちろんここでお金持ちの男を見つけて、結婚して、子供をたくさん産んで・・・」

「ははは。いや、本当は？」

　私は彼女がどうしてこの歳で大学生になろうと思ったのかが気になっていた。

「いつか大学生になりたいと思ってたの！　それで、やっと夢が叶ったわ！」と答えてくれた。授業が終わった後、私達は一緒に食堂に行き、チョコレートシェーキを食べた。私達は一瞬にして友達になった。それからしばらく、私達は毎日授業を一緒に受け、食堂に行き、ノンストップで話し続けた。ローズという「タイムマシン」が彼女の経験や叡智を私に聞かせてくれる度に、私は彼女に魅了されたのであった。 知らず知らずのうちに、ローズは大学の注目の的になっていた。

　大学の学期が終わった後、彼女は大学のパーティーでスピーチを任された。私は、その時の彼女の言葉を一生忘れない。彼女は司会者に紹介された後、前に上がった。彼女が話そうとしたその

時、彼女はスピーチのカードを落としてしまった。彼女は恥ずかしがり、イライラしている様子だった。それから彼女はマイクのほうに行き、
「バタバタしててごめんなさいね。キリスト教で禁酒してるから、ビールは飲まないと決めてたんです。それにしても久しぶりのウイスキーは美味しいですね！さっきのカードの順番もわからなくなったので、とりあえず私が知っていることを喋りますね。」 とアドリブで言った。
会場は笑いに包まれた。私達は年老いたから遊ぶのをやめるのではなく、遊ぶのをやめるから年老いてしまうのです。若さを保ち、幸せになり、成功するための秘訣は４つしかありません。毎日よく笑い、面白いことを見つけるのです。夢を持ちなさい。夢がないと、あなたは死んでしまいます。世の中は死んでいる人達ばかり！しかも本人達はそれに気づいていない。年老いていくことと、成長することは全くの別物です。もしあなたが１９歳で、１年中寝てばかりいて生産的なことをしなければ、２０歳になります。もし私が８７歳で、1年中寝たきりでいたら、８８歳になります。誰だって年老いていくことはできます。特別な能力や才能は要りません。大事なのは、いつも「成長する」機会を見つけることです。後悔をしないこと。年長者は、「やったこと」への後悔はありません。でも、「やらなかったこと」への後悔はたくさんあります。死を恐れるのは、いつも後悔ばかりしている人です。彼女は、勇敢に「ザ・ローズ」という歌を歌い、自分のスピーチを終わらせた。彼女は歌詞を聞き、毎日においてそれを実現しなさいと言った。

年が終わり、ローズは遂にずっと夢に見ていた卒業証書を手に入れた。卒業した一週間後、ローズは永遠の眠りについた。

彼女の葬式には、2000 人もの大学生が参列した。彼女は、「夢を実現するには遅すぎるなんてことはない」という大切なメッセージを彼らに伝えてくれたのだ。年老いていくのはみんな一緒である。しかし、成長するかどうかは、人それぞれである。

最後までお読みいただきまして

ありがとうございました。

株式会社くるま生活は幸福創造企業です。私たちは人が幸福になるために必要な事は二つあると考えています。①人に存在を認められる事②素敵な想いが実現すること事　私たちとご縁がある方は勿論のこと、ご縁の無い方も幸福になるように仕事させていただきます。＊^^)v

〒720-0961 広島県福山市明神町 2 丁目 9-25
株式会社くるま生活　　TEL　084-943-7123
info@kurumaseikatsu.co.jp
第 3 回作成　2013 年 7 月 27 日
コピー大歓迎。何部でもお届けします。